

韓国服の構成技法について

The Constructional Technics of the Korean Clothes

越 野 隆 子
Takako KOSHINO

はじめに

本校第2号研究集録に述べた韓国服が立体構成であるか、平面構成であるかという疑問点につき今回入手した資料を次の方法で研究した。

1 韓国服の歴史的考察

2 韓国服の構成技法

韓国服の資料は男物周衣ウルマキ 女物周衣チヨゴリ 男物襦ハチ 女物袴ハチ であるがこれ等を資料及び文献にもとづき調べたことをここに報告する。

男物韓国服を着用した写真を手に入れることができず目的が異なるため人物がはっきりしないが、「韓国美術五千年展」の中より写し取ったもので不明瞭であるが参考にした。



1 韓国服の歴史的考察

周衣については高句麗時代以来用いられ、中国の袍に似ているが上流階級だけでなく一般庶民階級にまで普及していた。

高句麗時代の壁画（本校第2号研究集録写真古墳壁画）にみられる周衣はその上から帯をつける風習があったが高麗朝の中期以後即ち12世紀頃（日本の鎌倉時代の中期）からは帯は用いず前開きで平紐でとめるようになり現在に至っている。又撰と称する領襟袖口裾に縁どりがつけられているが、これは襦にもみられるもので韓国服の特徴の一つである。

元来防寒の目的から発生したものであるが後代には季節に関係なく用いられ、単袷綿入れがある。使用した布は綿麻絹毛であるが、特に中国より織物の技術が導入され、高句麗時代では綾羅紗紬錦などが高級絹織物として製作され使用した。紵麻を材料とした麻布、楮などの樹皮を材料とした葛布があるが共に上流階級、庶民階級を問わず最も広く普及した織物である。

これ等の布で夫々その季節、目的により異なるが儀礼用盛装用防寒用として使用した。

形については日本の和服でいえば筒袖の雨ゴート、国際服の洋服でいえばオーバーコートにあたるものでいづれも膝下までの丈である。袖については上流階級では寛袖（広袖）が多く、庶民階級では窄袖（狭袖）が多い。

男物襦については本校第2号研究集録の女物襦と異なる部分を説明すると男物襦の袖下のふくらみはなく直線状の筒袖である。身丈は女物より長く、腰上位である。

韓国服の構成技法について

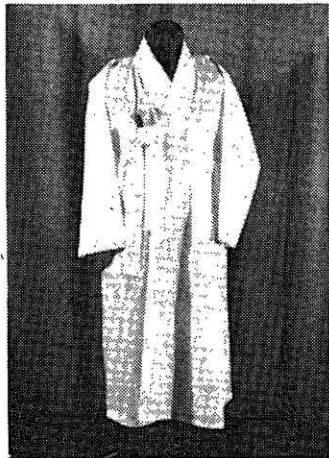
他の部分には変化がない。使用した布は綿 麻 絹 である。

袴についてはズボン状の下衣で日本の平安時代東帯着用の際使用した表袴の下にはく下袴である大口袴にあたり、袴の発生は一般乗馬生活の必要から騎馬民族の間に使用されていたズボン状の下衣である。この袴は男性が使用していたと考えられているが、東アジアの北方系民族は男女いづれも着用した。しかし女性はその上に裳を着けたため外部から見えなかっただけである。

袴の上部は腰上にたくしあげて帯で結び、男性は左右の足首をタニム（単衽 紐の一種）で結える。女物は男物よりも丈が短かく裾口をせまく丸みをもたせ恰好よくし、あくまでも単襦袢又は内裳の下着として用いているがやはり防寒の目的で使用している。布は男物袴と同じ布を使用する即ち表衣となるのである。女物袴は下着として使用するため自ら薄地で肌ざわりのよい暖いものを使用する。

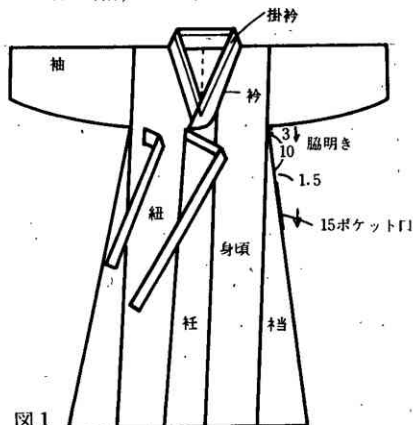
2 韓国服の構成技法

(1)男物周衣 単



各部名称

周衣 (袷)



周衣 図1

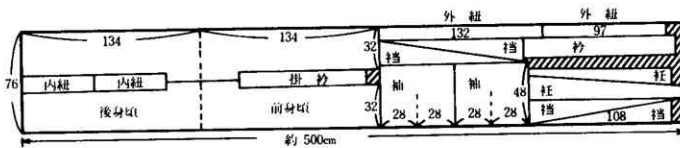
仕立上り寸法

男物・女物周衣 仕立上り寸法表

各部名称	男 物	女 物	
袖 大	46cm	43cm	
袖 口	24	15	
袖 付	26	24	
身 丈	130	105	
後 幅	28	26	
前 幅	左 24	左 24	
〃	右 28	右28.3(裾)	
		25.5(衽下り)	
衽	75	69	
衽 肩 明	10	9.5	
衽 下 り	左 22	左 18	
	右 32	右 23	
衽 幅	左 $\frac{8}{16}$	左 $\frac{6}{17}$	
	右 $\frac{4}{12}$	右 $\frac{5.4}{16}$	
衽 下	左 95	左 85.5	
	右 86	右 72.5	
衽 幅	左 7	左 7	
	右 5	右4.4 後 4.2	
衽 丈	約 90	約 80	
当 巾	裾 16	裾 17	
掛 衽 丈	約 78	約 68	
掛 衽 幅	3	2	
内 紐 丈	50	37	
〃 〃 幅	3	付 3 先 4	
外 紐 丈	左130 右95	左114 右101	
〃 〃 幅	6	左付 5 先 7 右付4.5 先6	
掛 衽 幅	3cm	2 cm	

布見積り方

身丈×2+袖丈×4+衽丈=總丈 巾
 134cm(縫代含む) 28cm(縫代含む) 112cm(縫代含む)492cm 76cm
 裁ち方



周衣 図3

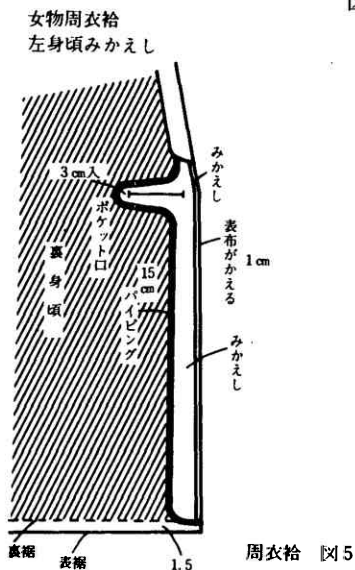
男物周衣単裁ち方

韓国服の構成技法について

- (13) 右衽衿下縫い 裏を表より0.5cm~0.8cm控える。
- (14) みかえしに図の位置に南京玉縁ポケットをつける

各部名称 女物襦と同じ
仕立上り寸法

ける 図参照



男物襦(単) 仕立上り寸法

各部名称	男物	
袖丈	44cm	
袖口	24	
袖付	26	
身丈	60	
後幅	28	
前幅	左24 右27	
衿	71	
衿肩明	10	
衽下り	左25 右30	
衽幅	左 $\frac{9}{10}$	
	右 $\frac{3}{3.5}$	
衽下	左29.5 右23.5	
衽丈	約 87.5	
衽幅	左 8 右6.5	
掛衽幅	3	
掛衽丈	73	
外紐幅	4	
外紐丈	左56 右45	
内紐幅	2	
内紐丈	40	

- (15) みかえし奥をパイピングする。
- (16) 左衽の衽下にみかえしをつける。みかえしは表布より1cm控える。
- (17) 裏袖付縫い 縫い代割る。
- (18) 裏脇明き仕末
- (19) 身頃表裏共に表衽付縫い 衽付の方法は襦と同じ要領。
- (20) 衽裏及びみかえし奥の仕末。
- (21) 外紐縫及び紐付。
- (22) 内紐縫及び紐付。
- (23) 掛衽付。襦と同じ要領。掛衽布は平織のベンルグ。白色使用。芯襦と同じ物使用。

襦 図1

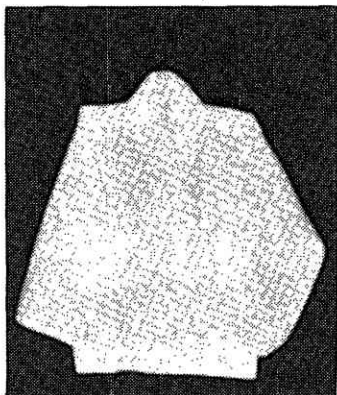
布見積り方

身丈×2 + 衽丈 + 衽丈 = 總丈 布巾76cm
 64cm 39cm 88cm 約 260cm

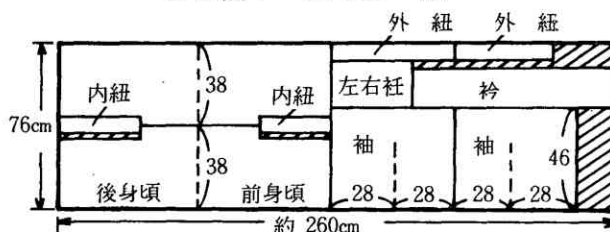
(縫い代含む) (縫い代含む) (縫い代含む)

裁ち方

(3) 男物襦 単



男物襦単 裁ち方 40



襦 図2

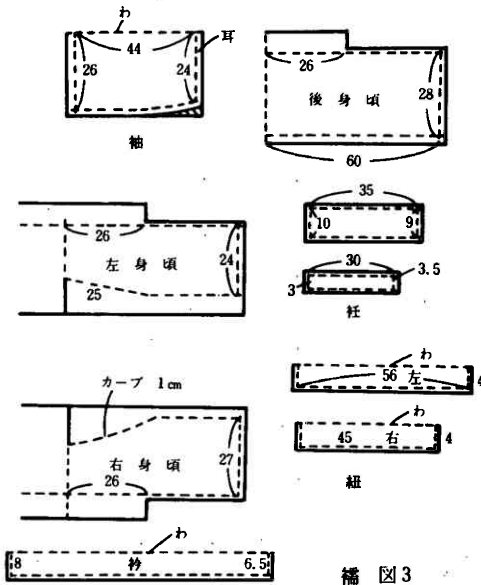
韓国服の構成技法について

布材質

綿 麻 合成繊維

標つけ

襦 標つけ

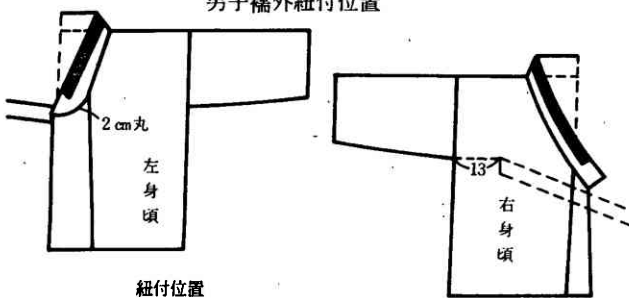


襦 図 3

縫い方順序

- (1) 背縫 縫い代は右身頃に折る。
- (2) 袖付縫 縫い代は後に折る。
- (3) 袖下縫 脇から続けて縫い 縫い代は後に折る。
- (4) 袖口の仕末 耳使用した場合は出来上り標に折りミシン縫い。裁ち目使用した場合は三ツ折りにしミシン縫いする。又はくける。
- (5) 衿付縫及び仕末 縫い代は衿に折る。
- (6) 衿下の仕末 三ツ折にし、ミシン縫いする。
- (7) 衿付縫 女物襦と同じ要領
- (8) 掛衿付 女物襦と同じ要領
- (9) 外紐縫及び紐付 図参照

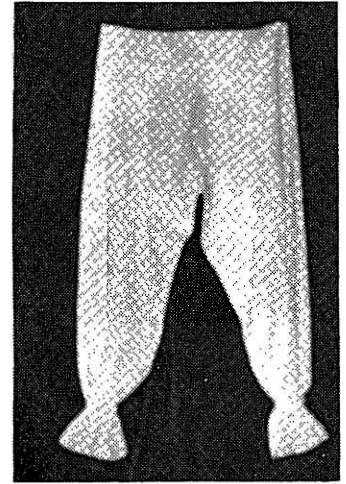
男子襦外紐付位置



紐付位置

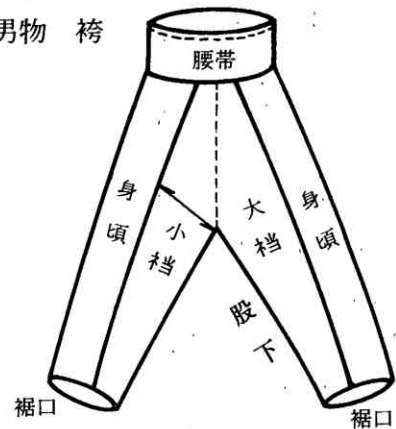
(10) 内紐縫及び紐付

(4) 男物袴 単



各部名称

男物 袴



男物袴図 1

仕立上り寸法

男物袴・女物袴 仕立上り寸法

各 部 名 称	男 物 袴	女 物 内 袴
脇丈(身頃丈)	102	90
脇 幅	18	腰围 152
股 上	55	46
股 下	80	44
腰 帶 幅	15	
腰 帶 丈	105	胴围 120
裾 口 幅	24	25

男物袴図 2

布見積り方

脇丈+大裆丈+腰帯大=總丈 布巾90cm

106cm 117cm 55cm 約 280cm

(縫い代含む)(縫い代含む)(縫い代含む)

韓国服の構成技法について

裁ち方

男物 袴 裁ち方 (実寸 1/10)



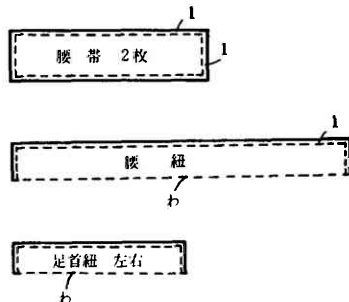
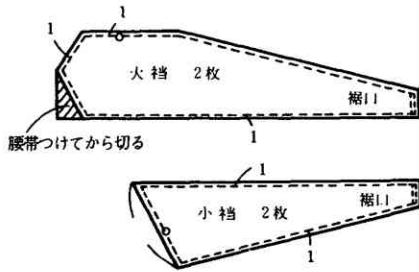
男物 袴 図3 腰帯つけてから切る

布材質

綿 麻 合成繊維

標つけ

男物 袴 標つけ 1/10 (実寸)



男物 袴 図4

縫い方順序

- (1) 左身頃に前後大裆付縫 縫い代は身頃に折る
- (2) 前後大裆と小裆を縫う 裁ち方の図に○印があるその部分を縫い、縫い代割る。
- (3) 右身頃に前後大裆 小裆付縫 縫い代身頃に折る。
- (4) 股下縫 左右続けて縫い 縫い代後に折る。
- (5) 裾口三ツ折縫い ミシン縫い。
- (6) 腰帯付縫 身頃 大裆を縫う。

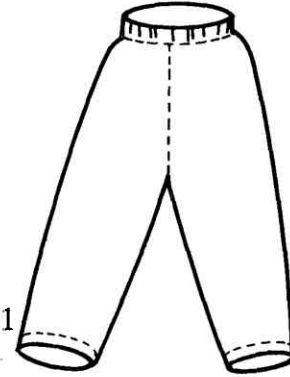
男物袴図3を参照(縫い代切り落す)

(7) 腰帯上部三ツ折縫い ミシン縫い

(8) 腰紐及び足首紐縫い(単衽) タニム
三ツ折縫い ミシン縫い

(5) 女物袴

女物内袴(現在)



女物袴衣 図1

男物袴と同型で寸法を縮少すればよいが現在では簡単に仕立てることができる。裳の残り布で仕立てる場合もある。

現在の女物袴を報告する。

仕立上り寸法

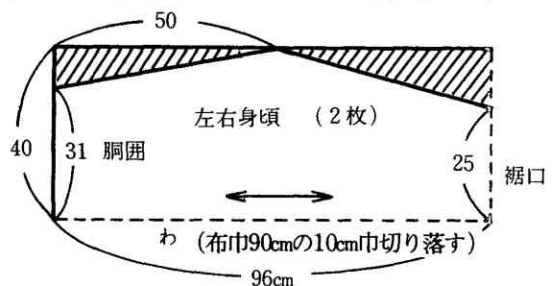
男物袴・女物袴 仕立上り寸法

各 部 名 称	男 物 袴	女 物 内 袴
脇丈(身頃丈)	102	99
脇 幅	18	腰囲 152
股 上	55	46
股 下	80	44
腰 帯 幅	15	
腰 帯 丈	105	胸囲 120
裾 口 幅	24	25

布見積り方

脇丈×2=總丈 布巾90cm
96cm(縫い代含む) 192cm
裁ち方

女物 袴 裁ち方 1/10 (実寸)

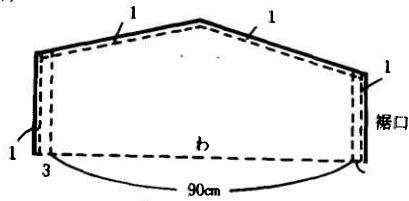


韓国服の構成技法について

布材質

綿 麻 絹 交織 合成繊維

標つけ



女物 袴 図2

縫い方順序

- (1) 左右の股下縫 縫い代割る。
- (2) 股上前より後に続けて縫う 縫い代割る
- (3) 裾縫 1cm巾三ツ折にし、ミシン縫いする。
- (4) 胴囲り縫 3cm巾三ツ折にし、ミシン縫いする。
- (5) 胴囲りにゴム紐通す。

註 裳の残り布で作る場合は裾口を細く、その場合裾口スリットする。明きは10cmで丸くカットする。

おわりに

韓国服が立体構成であるか、平面構成であるかという点につき上記で述べた構成技法から平面構成の諸条件即ち斜線、直線的裁縫による製作により平面的な衣服が構成され又平面に畳むことが出来る故に韓国服は平面構成である。今回の女物周衣袴については和服の身八ツ口にあたる脇明きがあり、衣服の衛生面からいえば自然換気が行われている。表布はワインカラー、ベルベットの一種、ファンネ、ベルベット(仏)又はレヨナント、交織、絹がある。裏布は表布と同系色のタフタを使用している。

韓国服の最大の特徴として白衣が尊重されていることは東アジアのツングース系民族が古来より白衣を用いる習慣があるが、李朝時代には身分制度の規制により服色の禁令があり、庶民は黒、青色の二色に限られたしかし喪服に限って白衣が許され、庶民は服喪期間を延長し専ら白衣を愛用した。又喪服には階級性もなく、衣服の材料は主に麻 葛であるためこれらの繊維は洗濯するごとに光沢を増し白色の方が退色しやすい黒、青色の衣服よりも見た目に感じよく、質素な国民としては経済的な白

衣を使用したと考えられる。これらの布は家庭において手で織られていたこともその原因の一つといえる。資料が手に入り次第研究を続ける予定である。

終りに色々な点で御懇切な御助言御指導を賜りました。大阪女子短期大学 末政清子教授 大手前女子短期大学 西川安也教授に厚く御礼申し上げます。資料及び縫製について御助言下さいました方に深く感謝致します。

引用文献

- 1 被服構成学 昭和31年6月5日発行
 〃〃42年6月30日〃〃
 水梨サワ子
- 2 韓国美術五千年展 1976 2月発行
 東京国立博物館 福岡県文化会館
 京都 〃 朝日新聞社
- 3 服装大百科事典 昭和51年7月20日発行
 上巻 下巻 増補版第一刷
 服装文化協会
- 4 東京衣生活 9 No.4 (1977)
 朝鮮服装史入門 杉本正年
 東京衣生活 11 No.6 (1977)
 朝鮮服装史入門 杉本正年